

〔教育実践報告〕

## 2020年度の法学教育実践をめぐって

大村 芳 昭

はじめに

### 1. 遠隔授業

- (1) オンデマンド型遠隔授業への取り組み
- (2) リアルタイム型遠隔授業への移行
- (3) 対面授業と遠隔授業との併用に向けて

### 2. SNSを使った情報発信等

### 3. 「質問箱」を使った学生支援

おわりに

はじめに

2020年度は、全国の多くの大学教員にとって、新型コロナウイルス感染の問題に向き合わざるを得ない1年間だったのではないだろうか。本学もその例に漏れず、感染拡大による最初の緊急事態宣言（2020年4月7日に東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県に発令、その後対象を全国に拡大したが、5月25日に解除）に伴って授業開始が繰り下げられ（5月7日に授業開始）、また授業の方式も、対面授業による三密（密集、密閉、密接）を避け、感染拡大を防止するため、急遽遠隔授業によることとなった。後期からは一部の演習において対面授業が再開されたが、年末の感染状況や2回目の緊急事態宣言（2021年1月8日に発令、3月21日に解除）

を受けて、年明けには再び全面的に遠隔授業によることとなり、そのまま後期の授業期間を終えている。

筆者は、満足な準備期間もないまま突入した遠隔授業に、はじめのうちは戸惑いしかなかったが、試行錯誤を繰り返すうちに徐々に遠隔授業に慣れていくとともに、遠隔授業を「通常通りの授業ができない状況下でのやむを得ない選択」とだけ捉えるのではなく、これまで出来なかった新たな授業上の工夫を試せるまたとない機会と考えて、いくつかの授業実践を意識的に行った。

本稿は、昨年度筆者が担当した講義科目（スポーツ法学概論、国際法、国際私法、物権法、家族法）について、その実践記録を残し（ただし授業科目ごとに固有の内容については本稿では割愛する）、今後の授業実践の参考に供しようとするものである。

## 1. 遠隔授業

### (1) オンデマンド型遠隔授業への取り組み

2020年度が始まった時点で、筆者は遠隔授業の経験が（記憶の範囲内では）皆無であり、オンライン会議への参加程度のものすらごく限られたものであった。それが、対面授業が困難な状況下でも学生に学びの場を与えねばならないとの考え方が元となって、極めて短期間のうちに全面的な遠隔授業への対応を余儀なくされた。

そこで、筆者がまず目指したのは、パワーポイント資料を使った動画教材（音声入り）を学内のポータルサイト（遠隔授業の実施に伴い予定を繰り上げて稼働させた「CGU ポータル」というサイト。元来は対面授業を前提としてそれをバックアップする意図で導入が決まったものだと聞いているが、新型コロナウイルス対応の一環として遠隔授業の要として機能することになったものである）にアップして受講生に視聴してもらい、という授業形態であった。ただ、動画ファイルをそのままアップするのはファイルサイズの関係などの点で

困難であることが判明したため、筆者が以前から細々と利用してきたYouTubeの限定公開動画（リンクを分配された者だけが視聴できる）として動画教材をアップし、そのリンクをpdfファイルに貼り付けてCGUポータルに載せることにした。また、2020年度まで利用してきた教育用プラットフォームである「WebClass」にも同じリンクをアップし、CGUポータル・WebClassのどちらからでも視聴できるようにしようと考えた（実はこの考えに至るまでもに若干の紆余曲折があったが、本稿では割愛する）。受講生には、毎週動画教材を視聴して学習し、前期の当初は小テストを毎週、前期の途中からは小テストを2週間に1回、さらに後期には小テストとキーワード提出をそれぞれ隔週で課すことにより、学習状況をモニタリングすることとした。

動画教材の作成手順は、おおよそ以下の通りである。①教科書の読み込みと参考資料の準備、②パワーポイント資料の作成、③授業の収録、④YouTubeへのアップ、⑤リンクの取得、⑥取得したリンクのpdf化、⑦CGUポータルとWebClassへの掲載。以下、それぞれについて簡潔に説明する。

①：あらかじめシラバスで指定していた教科書から、毎回の授業で扱う部分を読み込み、パワーポイント資料でどこを重点的に取り上げるか等を検討した。取り上げる内容については、公式サイト上で公開しているシラバスの内容に沿って、毎回の授業で指定した授業内容の中から、その科目の学習内容の中でも特に重要性が高いと思われるものや、具体的な事例に関するもので特に基本的と思われるものを選択した。逆に、重要度が高くないと判断したものや、事例の中でも応用度の高いものについては、時間の制約の関係もあり割愛した場合が多い。この作業と並行して、教科書以外に参考になるインターネット上の資料（国際機関や国など公的機関の公式サイトに掲載されている資料、研究者により公開されている論文、法律事務所の公式サイト上で公開されている資料など）や、六法・条約集その他参考図

書の現物（条文については電子政府などのインターネット上のデータも必要に応じて活用した）、特に国際法の授業で活躍した地球儀型ビーチボール（特定国や特定地域に関する問題を扱う場合に、ビジュアルに訴えるという意味で効果的と考えた）など、授業で活用できそうな資料・ツールの準備も行った。

②：準備した資料・ツールの有効活用を意識しながら、パワーポイント資料を作成した。その際、当初は資料に貼り付ける写真や表・グラフなどについても時間をかけて準備していたが、あまりに負担が大きくなり、また（当初は動画そのもののアップを考えていたこともあって）動画のファイルサイズが大きくなり過ぎる場合があることから、その後はあまり時間と神経を費やさないようになっていった。また、当初はビジュアルに訴える意味もありアニメーション機能を使うつもりでいたが、いま写している画面が何頁目なのかがアニメーションモードではわかりにくく、編集モード（左側に全部の画面が縦に並んで映る）の方がその点では優れているため、基本的には編集モードのまま授業を進めた。

③：自前のノート PC にインストールした Zoom（個人的に有料の利用契約を締結した）で一人会議室を立ち上げ、作成したパワーポイントを画面共有しながら講義を行い、その様子を同時に録画した。収録は大学の個人研究室で行うことが多かったが、その時々事情により、自宅や個室タイプのネットカフェ、あるいはビジネスホテルの客室で収録したこともあった。例えば初期の頃、まだスキルが乏しく遠隔授業そのものに対してまったく自信が持てなかった頃には、収録のモチベーションをアップさせるため、自宅近くのビジネスホテルに連泊して収録作業に没頭したこともあった。また、スキルが身につくようになってからでも、日程の関係で集中的に収録しなければならない場合には、大学で夜まで収録作業を続けた後、大学近くのビジネスホテルに移って仮眠をとりながら収録を続け、翌朝再び大学

に移ってさらに収録を続ける、ということもあった（大学に宿泊できればよかったのだが、それが難しかったためやむを得ないと考えた）。授業に際しては、当初、カメラやマイクはPC内蔵のものを利用したが、途中からヘッドセットを用意し、マイクはそちらのものを利用するようになった。外部サイト（国際法における国際連合広報センターの公式サイトなど）を受講生に参照させるときは、そのサイトも画面共有した。共有しているパワーポイントや外部サイトなどに手書きの下線を付したり○で囲ったりする作業は、PCに付属するタッチペンで行い、受講生にとっての見えやすさに配慮した。なお、動画1本の長さについては、1コマ分の授業を1本の動画に収録するのは学生側の負担が重いと考え、1本20～30分程度を目安にして、1コマ90分の授業につき動画の本数が3本～4本前後になるよう工夫しようと考えた。ただ、まだ慣れないせいもあり、実際には1本の長さにかなりの幅ができてしまい、短いものは10分未満、長いものは40分以上となった。この点は後に反省し、若干改善することができているはずである。

④：作成されたMP4ファイルをYouTubeの自分のチャンネル「YOSHIKI OHMURA」（3月末の時点でチャンネル登録者数48名）に限定公開動画としてアップした。後日の参照のためチャンネル内には以前から「中央学院大学」という再生リストを作成してあったが、それを利用して、アップした動画はすべてそこに登録する。筆者のチャンネルには、3月末の時点で700本以上の限定公開動画（その圧倒的大部分が2020年度の授業動画であると思われる）がアップされた状態となっている。なお、動画教材以外に、スマートフォンを使った授業収録について、少しずつではあるが工夫を重ねて行く過程を公開動画として収録し、同じチャンネルで公開している。2021年3月31日午後3時現在の再生回数は、最初に公開した「zoom 板書授業テスト」が507回だが、その後公開した「スマートフォン授業録画実験」「祝スタジオよっちゃん仮オープン」「スタジオよっちゃん完成ご挨拶」「会議 SLUB520使用テスト」はいずれも100回未満となっ

ている（ちなみに、それらとは別に、学生の学内立入禁止中だった2020年5月にキャンパス内を散歩して撮影した長さ10分弱の動画「2020年5月20日」は、Twitterなどで複数回宣伝したせいか、視聴回数が1100回を上回っている）。

⑤：YouTube からその動画のリンクを取得した。限定公開動画であるため、取得したリンクがないとその動画を視聴できない反面、リンクさえあれば、その科目を履修していない学生や、さらには学外の部外者も視聴できることになるので、リンクについてはその点に留意した。無断でリンクを外に晒されてしまえばこちらとしては（その動画を削除するくらいしか）対応策がないが、幸いなことに現時点では、授業動画が外部で晒されているとの情報は入手していない。

⑥：リンクの改変などを防ぐため、いったん Word ファイルに貼り付け、必要な説明を書き加えた上で、pdf として保存した（最初の頃は、pdf に変換して保存する程度の知恵も働かず、Word ファイルのまま保存したこともある。実にお恥ずかしい話である）。なお、リンクをアクティブな状態にしてから（リンクの直後で改行してリンクに青い下線があることを確認できればよい）保存することが重要である（そうしないと、せっかくリンクを公開しても動画を観ることができず、範囲指定や右クリックなどの余計な手順を踏むことが必要となる）。

⑦：2020年度の授業は CGU ポータルを中心に行ったため、リンクを掲載する場所も CGU ポータルが最善かと思われた。しかし、特に年度初期の頃、CGU ポータルへのアクセスが（特に授業開始時刻の前後など）集中することによって CGU ポータルがうまく機能しなくなることがあったことや、受講生から動画が見られないとの指摘（理由は今でも不明である）が時としてあったことから、前期については CGU ポータルに加えて WebClass にもリンクを掲載することにした。ただし、後期になって、大

学全体として Microsoft Teams の利用が推奨されるようになったことと、WebClass の利用が次年度から出来なくなるとの未確認情報（実際には 2021年度も利用できるようである）を耳にしたことから、後期は CGU ポータルと Microsoft Teams にリンクを掲載することとした。

## （2）リアルタイム型遠隔授業への移行

こうして前期の間、遠隔授業を続けることによって、筆者は遠隔授業に関するある程度のスキルを得ることができた。その後、夏休みをはさんで後期に入った頃からは、徐々に次年度（2021年度）の授業のことを意識するようになった。本学が通信制の大学でない以上、いつまでも遠隔授業ばかりを続けることはできないこと、だからといって、2021年度から全面的に元通りの対面授業に戻り、遠隔授業の必要性が皆無となることも想定しにくいことから、対面授業を始めてからも、必要に応じて遠隔授業的な対応が可能となるような方向性を探ろうと考えた。

そこで、まずは対面授業準備の第一段階として、後期の最後の 3～4 回程度、授業動画の収録を（それまでは任意の時間帯に行っていたものを）本来の授業時間に合わせて研究室で行い、希望する受講生はそれを PC やスマートフォン経由でライブ視聴できるが、特にライブ視聴を希望しない者はそれまでと同様にオンデマンド授業動画として後で視聴することもできる、という方式を採用してみた。これは、シラバス上オンデマンド方式の遠隔授業としているものをリアルタイム方式に変更したわけではなく、あくまでオンデマンド方式を前提とした上で、その動画教材を収録しているところを観に来てもいい、という程度の呼びかけを行っただけだった。特にリアルタイムの視聴を強力に求めたわけでもなく、実際にも、リアルタイムで視聴しに来てくれた受講生は、各科目の受講登録者数の 10 分の 1 未満から 4 分の 1 程度にとどまっていた。時には、収録がうまく行かなかったことに収録中に気付かず、動画を CGU ポータル等にアップした後で受講生の指摘を受けてやっと気づき、補足の動画教材を作成したことや、1

回分をまるまる収録しなおしたこともあった。

### (3) 対面授業と遠隔授業との併用に向けて

次に対面授業準備の第二段階として、対面授業に近い環境で動画教材の収録を行うこととした。といっても、教室を利用するのは（大学側に無断で教室に立ち入ることには問題があったし、仮に許可を得て教室を使ったとしても、収録終了後の消毒などの手間がかかることになるという意味で）ハードルが高かったため、収録は相変わらず自分の研究室で行った。

まずは手持ちの小さなホワイトボードを教室の黒板／ホワイトボード代わりに用い、パイプ椅子に立てかけて、それを使って講義をする様子を、ホルダーを使って固定したスマートフォンにインストールした Microsoft Teams で収録する方法を用いた。この段階で PC を使わなくなったのは、対面授業再開後に教室で収録を行う場合の簡便さを考慮したからである。収録した動画は、PC から同じアカウントで Teams にログインすれば、PC 側で MP4 ファイルとしてダウンロードし YouTube にアップすることができた。

しばらくして、より大きな脚付きのホワイトボードを購入し、それを使うようになった。このように、スマートフォンによる収録には次第に慣れていった。しかし、それでも教室の黒板／ホワイトボードに比べると圧倒的にサイズが小さいため、教室での対面授業の感覚を再現するまでには至らなかった。また、小さな面積に確実に要点を書かねば、という思いから、対面授業のように板書しながら講義するのではなく、1画面ごとに板書をしてからその画面について講義し、板書を消して次の画面の板書をしてから講義を再開する、というスタイルになっていた。

その後、壁に貼ることのできるシート状のホワイトボード（ホワイトボードシート）の存在を知り、縦45センチ、横2メートルのものを自分の研究室の壁に縦に2枚並べて貼り付けることによって、縦約90センチ、横2メートルの「ホワイトボード」を設置した。そして、その正面（距離約2



メートル) に三脚で固定したスマートフォンを置いて、ホワイトボードの全体が映る状態で収録するスタイルに移行した。板書の文字を基本的に一辺10センチ以上とすることによって、スマートフォンから視聴している受講生にも板書の文字が見えやすいよう工夫した。ただ、音声をスマートフォン本体のマイクから拾っていたため、スマートフォンに背を向けて話すと声が聞こえにくい、という声を後に聞くことになり、それが後のデジタルヘッドセット(イヤホンとマイクが一体になった、小さくて軽量の機器であり、片耳にセットして用いる。スマートフォンとの間はBluetoothで接続する)使用の動機付けとなった。まだ授業で用いたことはないが、研究室での実験では、デジタルヘッドセットを使用すれば、スマートフォンに背を向けても音声が聞こえることが確認できている。

限られた条件と時間のもとで筆者にできるのはここまでかと思われる。あとは対面授業が始まってから実際の教室でうまく収録できるかどうか、という段階にまで現時点(2021年3月末)では到達している。

## 2. SNSを使った授業情報発信等

授業に関する情報発信は、CGUポータルを中心に行っているが、私が発信した情報をCGUポータルで見ることができるのは、私の担当授業の受講生のみである。しかし、私の担当授業の受講生以外の学生であっても、本学の授業に関して質問してくてくれた学生たちに対し、「公式サイトを見なさい」というだけではない、もう少しきめ細かな情報提供ができないか、あるいは、学生の感じていることを身近に感じる術はないか、と考える中で、ふと気づいたのが、Twitterの存在である。

Twitterは以前から細々と利用していたが、本学の学生の中にも利用者が少なからずいることや、たとえTwitterを利用していない学生でもウェブで検索すればツイートの内容を確認できることから、意識的に大学関連の情報をTwitterでつぶやくことにした。これは2020年度から始めた

ことではないのだが、2020年度以降は学生への情報提供をより意識して、ハッシュタグを活用したり、学生や入学予定者をより積極的にフォローしたり、困っている学生を見つけたときは注意深くツイートしたり、といったことを行うようにした。

3月31日午後3時現在、筆者がフォローしているのが1282アカウント、筆者をフォローして下さっているフォロワーの皆さんが793アカウントとなっているが、先日ラフな形で確認したところでは、フォロー&フォロワーのうち300人内外は本学の在学学生、入学予定者または卒業生であるものと推測され、春の入学シーズンを迎えて、僅かながら増加しつつある。

本学の学生・新入生をTwitter上で発見すると、ついフォローしたり声をかけたりしたくなる。無言フォローやいきなりのコメントは、学生を戸惑わせる場合があるのかもしれないが、プロフィールでこちらの素性を明かし、無言フォローなどについてのお詫びと、ブロックをご自由に、というメッセージを載せてあることによって、かろうじて許容範囲内と判断していただけるのではないかと考える。

最近では、私のツイートに少数ながらもいいね！がついたり、リツイートされたり、フォロワーでない学生や入学予定者からダイレクトメッセージが届いたりするようになっている。実に有り難いことである。もちろん、ダイレクトメッセージには必ず返信しているし、ツイートの中で質問があればわかる範囲で答えるようにしている。同様の質問が今後も予想されるような場合に、筆者が大学側に問い合わせて回答を得ておき、それをもとに学生に回答する場合もある。その反面、ただ問われたことを答えるだけではなく、本来自分で参照すべき公式サイトへのページ（へのリンク）を回答とともに掲載したり、回答そのものではなく調べ方や問い合わせ先（電話番号や問い合わせフォームなど）を示したり、といった形で、状況に応じて質問の答えを返す以上の学生支援を心掛けている。

### 3. 「質問箱」を使った学生支援

「質問箱」という、インターネット上で匿名の質問ができるサービス（スマートフォン上ではアプリ）がある（回答する側は匿名ではない）。筆者は2019年の春頃にその存在を知り、4月から利用を開始した。現時点（2021年3月31日正午まで）で1921件の質問に回答し、798件については回答せずにアーカイブ送りとしている。質問内容は、大学や授業に関するものからプライベートなものまで様々だが、少なくとも大学や授業に関する質問については極力回答するように努めて来た。以下の記述も、大学や授業に関する質問だけを抽出したものではないことはあらかじめご理解いただきたい。

2019年度については、4月2日の最初の質問から始まり、5月に140件近い質問に回答したが、その後質問は減少した。授業が終わりにさしかかった2019年12月から成績が明らかとなる2020年2月にかけて再び質問が増加し、3ヶ月の合計で500件ほどに回答した。

そして2020年度を迎えたが、4月から6月にかけて、時期的にちょうど、新型コロナによる授業開始時期の変更や、5月7日から始まった遠隔授業（しかも最初の1週間はCGUポータル稼働が間に合わず、ウェブシラバスに基づく課題学習となった）、さらに新しく稼働したばかりのCGUポータルをめぐる問題（ポータルの不具合や教員の対応の問題など）といった様々な問題が立て続けに起きた時期だったこともあってか、質問や意見（中には特定教員に対する明確なクレームもあったが、筆者としては回答を避けるか、あるいは中立的な回答に徹することにしていった）など、様々な声が頻繁に届くようになった。前年の4～6月の回答数が合計で160件ほどであったのに対し、この年の4～6月の回答数は合計730件近くになった。その後は前年同様、質問は減少し、1月に100件近くになった以外はすべて2桁以下、10月以降の回答数は前年度より少ない状況が続いた。

その中でも思い出深いのは、2020年5月の1ヶ月間で476件の質問に回答したことである。ということは、1日平均15件以上の質問に答えたことになる。筆者としては、学生に寄り添いたいという気持ちに加えて、遠隔授業やポータル関連の対応に追われている事務局（特に教務課）の負担が私の回答によって少しでも軽くなれば、という気持ちでいた。実際にどの程度効果があったのかはわからないが、大量の質問に答え続けることにより、筆者自身としても、学生の側からの見え方や感じ方など、不十分ながらも学んだことは多かったように思う。回答のスキルも少しは向上したものだと思いたい。

## おわりに

対面授業や課外活動の可否などについて、本学では、大学が独自に定めた「中央学院大学における新型コロナウイルス感染症対応指針（抜粋）」（2021年3月16日改定）に沿って対応することとなっている。この指針によれば、レベル2になれば授業は「感染拡大防止に配慮し、原則として対面授業を行います」とされている。他方、大学公式サイト「保護者の方」欄に2021年3月25日付けで掲載された「保護者様宛てメールの配信内容（3/25）」によれば、「現時点におきましては、4月からの授業は『原則としてすべての授業を対面授業』で実施するという方針のもとで、現在準備を進めております」としつつ、「今後、感染拡大の影響などにより授業実施方法を変更する場合」があることも想定されている。

2回目の緊急事態制限解除後、首都圏では新規感染者が増加傾向にあり、まだ予断を許さない面があるが、仮に現在の方針の通り4月から対面授業が始まるとすれば、そのときこそ、スマートフォン・三脚・ヘッドセットのいわば「三種の神器」をフルに活用して、対面授業とリアルタイム遠隔授業、オンデマンド遠隔授業の3つを同時並行的に実施する（といっても授業動画をアップするのは後からになるが）ことが可能となる。もっば

ら遠隔授業のために動画教材を準備していた頃と比べれば、教員側の労力もかなり削減されることになる。

学生の中には、板書よりもパワーポイント資料の方が読みやすい、という声があることも事実である。しかし、資料の読みやすさはあくまで考慮すべき要素の一つに過ぎないのであって、資料作成に過大な時間を割き続けなければならない状況は、教員の時間管理上、バランスを欠くものであるように思う。また、パワーポイントと比べて板書は短い時間と少ない労力で自由自在な表現が可能であり、(筆者の感覚が古いのかもしれないが)教員にとって手放すにはあまりにももったいない表現手段である。筆者は大学で教えるようになってから20年以上、板書にこだわってきた経験と自負があり、改善の余地があるとはいえ、これからも板書にこだわり続けていきたい。(2021年3月31日脱稿)